

2017. 4. 27 (木)

## 自分の価値に出会おう

大岡 栄美

### 関学らしさ ーマスターリー・フォー・サービス

社会学部で、ソーシャル・キャピタル論、ソーシャル・ネットワーク論という、関係性の社会学を担当している大岡栄美と申します。今月のチャペルテーマは「KGスピリット」です。入学式から約1ヶ月、関西学院での生活を経験して、みなさんのなかでも少し「関学らしさ」についてのイメージができたのではないのでしょうか。今日は、私が担当する演習、いわゆるゼミ活動を紹介しながら、関学がスクールモットーとして大切にす「マスターリー・フォー・サービス」の意味について考えてみたいと思います。

### 大学ゼミでの学び

入学後、あるいは関学を志望校として準備を始めてから、この「マスターリー・フォー・サービス」という言葉には皆さん何度も触れてきていることでしょう。「奉仕の練達」と訳されますが、それだと正直よく意味が分からないところもあります。私自身はその意味を「自分自身が主体となって、他者に寄り添い、他者のために自分の能力を役立てていくこと」として理解しています。

例えば大学では、すべてが時間割として定められていた高校時代とは違い、自分自身の問題関心や生活時間に応じて、与えられた選択肢の中から、自分が主体となって、時間割を組み立てていきます。「マスターリー・フォー・サービス」の「マスター」つまり主人として、自分の判断のもとに大学での学びを組み立てるわけです。

2年生の秋から、少人数で自分の問題関心を掘り下げ、調査や研究を深めるゼミが開始します。社会学部では多くの先生がそれぞれのテーマでゼミを開講しており、その選択をしていくのも、また自分自身です。私のゼミは、フィールド社会学という専攻分野に位置づけられていますが、「現代社会におけるコミュニティの変容と行政・NPO・企業による新たなコミュニティづくり」をテーマにしています。

学生はこの問題関心に共感し、ゼミを選び、現在西宮の二つのフィールドで活動しています。1つは、JR西宮駅にほど近い、西宮卸売市場の活性化についての調査研究です。この卸売市場は主に果物や野菜の卸を扱う市場ですが、施設が老朽化し、スーパーの台頭で商売を閉める店が増えて空き店舗が増加するなど、様々な課題を抱えています。このフィールドでは、ネットショッピングなど

も一般化した現代の消費社会の中で、「市場の価値」をどのように再構築するのかを調査します。課題を学生目線で掘り下げ、課題解決につながるような提言をするという調査研究活動です。もう一つのフィールドは、西宮市の鳴尾東地域での、コミュニティづくりの活動です。高齢化率が27%と全国平均とほぼ同じこの地域で、ヒアリング調査やまちの資源調査を行い、何が住民にとっての困りごとなのか、それをどう解決するのか、につながる提言をします。

ゼミ生たちは自分が選んだ問題関心に応じて、文献調査やヒアリング調査を進めていきますが、地域課題解決のプロでも、コミュニティ問題の専門家でもありません。ましてやその地域に暮らす住民でもありません。そんな若者が地域に入って何ができるのか、と疑問を持つのはおかしなことではありません。しかし、地域の方は、学生の行動力や若い感性で素直な目線から出される疑問や提案をとても歓迎していただきます。例えば、去年の卸売市場の活動では、「0601」つまり6月1日を「おろいちの日」にしてイベントをしたらどうかというような提案を市場の方は大変喜んでくれました。

「自分なんか地域に入って、何ができるのか」と活動の初期には疑問に思っていた学生も、期待や責任に応えるために、もっと知識を付け、より地域を知り、ニーズに沿った提案をしようと、自分たちで自分たちのプロジェクトを鍛えていきます。そうして結果的には自分自身が成長を遂げることで、それが地域の元気や活力、課題解決への刺激へとつながっていくのです。こうした学び、ゼミの在り方も、「マスタリー・フォー・サービス」の一つの例としてとらえることができるので

はないかと考えています。

## 自分の価値に気づく

自分の能力や自分の価値を誰かのために役立てていく、といっても、なかなか自分の何が他の人のために役立つのかは見えてこないのが難しいところです。特に自分の周りが「自分と同じような人」に囲まれている場合、自分の価値というのは見出しにくいでしょう。例えばまわりが自分と同じ関学生ばかりの場合には、関学生らしさや関学生だからこそ役に立てること、というのは見えてきにくいものです。これが、小学生の中に大学生が一人、高齢者のグループの中に大学生が一人という状況や、他大学生の中に関学生として一人という状況になると、まったく変わるといえるのはみなさんすぐに想像できると思います。小学生の場合であれば、遊びのリーダーとして、高齢者の中であれば、重い荷物を持つとか、若い世代の現状を伝えるとか、自分だからできること、というのが見えやすくなります。

別の例でいえば、日本人だけに囲まれていると、日本のよさや日本人だからこそ貢献できること、という自らの価値や役割への気づきというのも難しくなるといえないでしょうか。関西学院には世界中からたくさんさんの留学生が集まっています。社会学部にも韓国や中国からの留学生がクラスメイトとして学んでいます。多様な他者と交わることで、自分の思いもかけなかった部分を活かす、そのことが自分自身の喜びや成長にもつながる、ということが必ずあると思います。大学での学びは、大学の教室の中だけにとどまるものではなく、この関学のキャンパスの中だけにとど

まるものでもありません。将来、自分のどんな価値を社会に役立てていきたいのか、自分に何ができるのか、何をキャリアにするのか、自分の未来にもつながる自分の価値を発見する他者との出会いを、ぜひ学生時代にたくさん経験してください。

5月のチャペルでは、上ヶ原ハビタット、熊本地震現地ボランティア活動参加学生からの報告などが予定されています。先輩の活動に耳を傾けることで、若者として、無理なく、自分も楽しみながら他者に寄り添う「マ

スタリー・フォー・サービス」の校風に触れられると思います。関西学院は皆さんに素晴らしい出会いの場や成長の機会を等しく与えてくれます。しかし、それをどう受け止め、どう活かしていくかは「マスター」としての皆さん次第です。大学に慣れることで精いっぱいな時期を過ぎた後は、どのようにこの4年間の学びの時間を自らデザインするのかを考え、素晴らしい大学生活にしてください。

(社会学部准教授)